

## 中世の本殿の遺構

出雲大社の古代・中世の本殿は、高さ約 48 尺にも達していたと言われていますが、初期の本殿の構造の詳細な図面はほとんどありません。稀な例として、大社の宮司家（國造）に伝わる「金輪かなわの御造営差図ごぞうえいさしず」があります。

13 世紀から 16 世紀にかけて描かれたこの本殿の平面図は、当時の本殿を、3×3 のグリッドに配置された 9 本の柱で支える建物として描いています。このデザインは現在の構造と同じ設計ですが、規模ははるかに大きいです。図では、各柱の直径は約 3 尺で、3 本の巨大な丸太を金属製の工具で束ねています。構造物の高さは明記されていませんが、入り口の階段の長さはおよそ 109 尺と言われています。何世紀にもわたって、このような巨大な建造物の物的証拠は見つかりませんでした。

その認識が一変したのが、2000 年から始まった考古学的な発掘調査です。本殿前の八足門付近の地中から、数本の柱の跡が発見されました。見つかったのは 3 本で、調査区域外にある残りの 6 本は周辺の建物の下に残っていると思われる。発掘された柱は、中央の心御柱、正面の宇豆柱、南東の側柱です。柱の配置は「金輪御造営差図」の記述と一致しており、放射性炭素による年代測定の結果、西暦 1248 年の大社の造営遷宮時に設置された可能性が高いことを示しています。

参拝者は、拝殿と本殿の間にある敷石部分にある、円形の赤いタイルに気づくことでしょう。これは、柱が発見された場所を示しており、その大きさは、柱（外側の円）を構成する 3 本の丸太（内側の赤丸）の大きさを正確に反映しています。南東側の柱は発掘終了後に埋め戻されましたが、心御柱と宇豆柱は取り出され、保存されています。心御柱は宝物殿に、宇豆柱は隣接する島根県立古代出雲博物館に展示されています。